

民主青年新聞

●ホームページ www.dylj.or.jp ●Eメール minsin@dylj.or.jp

見どころ

暮らし破壊する大軍拡・増税

(3面)

勉強シリーズ 地理総合

(6、7面)

「戦争国家」づくりを許さない

(10、11面)

酪農の未来を守れ

私たちの生活に欠かすことのできない牛乳を生産する酪農。現在、その現場は、かつてないほど危機的な状況に直面しています。北海道・厚岸町の酪農家で、釧路地区農協青年部協議会・副会長の小野寺竜之介さん(33)の牧場を訪れ、経営の現状を聞くとともに、いま必要な支援と酪農のこれからについても考えます。

〔塩田悠玄記者〕



▶牧場で牛に囲まれる小野寺さん。人懐こい牛たちに、撮影中、記者も小野寺さん同様取り囲まれた

牛乳を「搾らせてもらう」ということ



道東に位置する釧路地域、厚岸町片無去(かたむし)に小野寺さんの牧場があります。日の出前の真つ暗な早朝から作業は始まりました。取材に訪れた午前6時半の気温は氷点下8度ほど。牛たちは、大自然の寒さに震える記者にとどき興味を示しますが、目の前の朝食を食べるのに忙しそうです。

自分から「継ぎたい」と

小野寺さんの酪農の形態は、放牧を基本とし餌も牧草を主に与えて、乳量を追求せず牛が健康であること、大事にする「マイペース酪農」と呼ばれているもの

小野寺さんの牛たちの主食は牧草です。穀物などから作られた配合飼料も与えますがごく少量。餌の牧草も牧場で夏の間に収穫した物を与えています。牛たちが牧草を食べている間、「ミルカー」という機械を使いながら乳搾りの作業をこなしていきます。一頭一頭の体調を確かめながらミルカーを付ける小野寺さん。「体調が悪いときは付けようとする」と嫌がるので、牛の体調を観察しながら搾る」と言います。牛たちの朝食が終わると放牧し、見渡す限りの銀世界で運動をさせます。夏場など牧草が生えている時期は一日中放牧して、牛たちは好きなだけ牧草を食べると言います。夕方4時頃にはま



▲乳絞りをを行う小野寺さん



▲子牛に牧草を与える小野寺さん。乳を出す牛たち以上に子牛は好奇心が強かった



です。両親から2021年を育て、草や土づくり、税金の処理までこなしていま「学校では酪農を専攻していた。途中競走馬の世に「経営者」として一から牛を育て、草や土づくり、税金の処理までこなしていま放牧を中心とした酪農に関わりたい気持ちが次第に強くなっていた」と小野寺さん。学校ではうちのよう



▲カメラを向けている間ずっとこちらを見る牛もいて、少し歓迎されている気分

「マイペース酪農」をやっているときは、親に『家で仕事したいです』とちゃんと言います。「牛は子牛を生まないと乳が出ない。配合飼料をたくさん与えれば乳量は多くなるが、それに伴う病気のリスクや、お産の回数も少なくなるなど牛を短命にしてしまうこともある。放牧などの運動もさせてあげないと膝に水がたまってしまふ」と小野寺さん。「牛が健康でストレスなくいられるような環境を自分なりに提供したい」と思っている。こちらは搾らせてもらっているって感じだから」と話しました。

(2面につづく)